

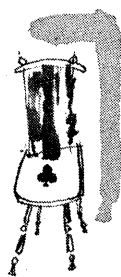
# 精神薄弱児の保育

仙台にきて、三年めをすごそうとしている。仙台にきた時、是非、始めたいと思っていることがあった。それは、精神障害とか情緒障害を持つ子どもたちの保育グループを作ることだった。そして、その希望を持ちつつも、いまだ実現していない。

希望の灯はまだ消えずに持っているつもりなので、いつか始めたいと、その思いを持ち続けている。しかし、こういうことは、考えたらすぐ走り、行動しないといけないのかもしれない。

障害をもつ幼児の保育ということを考えるきっかけになったのは、東京のA研究所の家庭指導グループでお世話になったことに始まる。週二回、七、八名ぐらいの幼児グループを二名の先生が担当する。就学前の幼児は、何らかの精神的な障害があり、私もそこで一人の自閉的な子どもを受けもちながら、多くのことを、子どもたちや、先生方から学んだ。そこでは、自由な、明るい保育が、のびのびと展開されていて、今でも心に残っている。そこには、子どもたちと親と、保育する人たちとの

石割陽子



調和と信頼があったと思う。仙台に来る時、グループの責任者でいらっしやるT先生から、仙台で、やれることがたくさんあるという励ましの言葉をいただいたのに、私の方はいまだ、何ら形ができてこない。

ヨーロッパの施設・ベテル

昨年夏、ドイツでO M E Pの世界大会があったので、それに参加し、北ヨーロッパの保育を中心に見た。主として、精薄施設を見てまわったが、いろいろな思いが頭をめぐっていた。何か、考えたり、見て歩いたりばかりいて、日を過ごしてしまっただよように思える。幾つか見学した精薄施設の中で、印象に残っているのは、ドイツのベテルの町で見てきたこと、またフィンランドのヘルシンキ郊外の施設を訪ねたこと、そして、スエーデンでは、ストックホルム郊外の施設等だった。

ベテルの町は、精神障害をもった人たちと、もっていない人たちが、共に共同体を作り、生活を営んでいた。それは、いわ

ば精神障害者と健康な人たちとの生活の統合（インテグレーション）ともいえるかもしれない。ホテルの町には、世界の国々からボランティアが来て、人々の生活の介助をするが、医者とか、心理学者とかいった専門家の数は、必ずしも充分ではないと、かつてそこで働いていたドイツ人の学生が話してくれた。

町の中の幼児グループの保育は見学できなかったが、養護学校の低学年のクラスを見学した。木製の、丸い、碁石ぐらいの大きさのものを使って、数の学習をくり返してやっていた。機能訓練の体育館もまだ新しく、屋内プールもあった。

スエーデン・デンマーク・フィンランド

スエーデンでは、二つの精薄施設を訪ねたが、その一つは、ストックホルム郊外から五、六十キロくらい南にあるもので、何よりもうらやましかったのは、緑と湖にかこまれた広い美しい土地があり、施設全体が明るいふん囲気一杯だったことである。保育内容そのものは、驚くものはなかったが、小人数制で、たっぷりしたスペースの中で、保育さんが世話をしていた。ある一室で、幼児に水遊びをさせていた。大きな水槽が室内にあり、水に手を入れたり、おもちゃの舟を浮かべて遊んでいた。普通児の保育所等でも、水遊びを保育に積極的にとり入れているようだった。この国立の比較的新しい施設は、人間的な暖かさが生活の中にあるように思われた。夕食はもちろんだが、

昼食時には、自分の寮に帰って、寮の保育さんと一緒にするしくみだった。この施設には、所長にあたる人が二名いて、その一名の人は女性で、非常に自由な考え方をもった人で、人間としての魅力が感じられた。彼女は、ロンドンのモンテッソリア国際学校でも学んできた人で、美術に関しても大変造詣の深い人であった。教材ではかなり苦労しているようで、普通クラスの小学校の教科書をたくさん用意していた。現在、いろいろ研究中ということだった。難聴児のためのオーディオルームは、立派な設備を持っていた。

もう一つの精薄施設は年齢の幅も大きく、また重度の子どもから通園している子ども等、さまざまであった。精薄者、精神病者の作業療法の施設はかなり大がかりなものだった。ここに通園している子どもの保育にあたっては先生に会って、室内をみせてもらったり、子どもについて話しあった。この先生は、精薄児の教育者として、スエーデンで名前の知られた人のようなだったが、彼女を通じて私が一番強く感じたのは、精薄の子どものたちの可能性を見つめる態度と、自分の情熱をかけ、子どもたちを愛しているということが、外からも感じられることだった。アメリカで精薄教育をやってきた経験もあるこの人は、この学校ができたとき、建物が、建築家の美的観点から建てられ、教師の実践的な経験からの希望がしりぞけられた時、猛然と反

対して、完成した建物の一部を改造してもらったというエピソードの持主でもあった。この人の意志の強さが感じられた。

他日、ストックホルム市内の普通児の保育所を訪問したが、子どもたちは一応、年齢でクラスわけされていたが、違うクラスへの移動が自由であった。その所長さんは、保育における「インテグレーション」（統合）と「インデペンデンス」（独立）を強調していた。デンマークのコペンハーゲンの幼稚園を訪れたときに、案内してくれた心理学者で、精薄児の保育に興味を持っている人から、普通児のインテグレーションを、どう考えているかと聞かれ、それでもインテグレーションという言葉を耳にした。彼は、そのことを真剣に考えているようすだった。精薄児の統合は、わが国でもかなり考えられ、行なわれている所もあるが、問題は、多々あるようだ。

フィンランドでは、ヘルシンキ郊外にある国立の精薄施設を見せてもらったが、やはり、美しい緑の多い、環境の良さに目をみはった。そこは、幼児から大人までの施設だった。スエーデンでも、イギリスでもそうだったが、大人のいる施設は、必ず、作業療法的な一室があり、そこで簡単な作業を行っていた。そこでは、電気のソケットの組合せ等をやっていた。幼児の遊戯室は地下にあって、クラシック音楽をバックグラウンド・ミュージックに流していた。音楽の選択をどうしているかと、

その心理学関係の人に聞いてみると、まだ充分検討していないことだった。幼児の遊戯室が地下にあるのは、採光とか、自然への接触、また、遊びの空間への広がりという点から考えると、私自身は、あまり感心しなかった。

イギリス

イギリスでは、ロンドンから少し離れた精神病院を訪れたが、遊戯室に、精神病の大人と精薄幼児が一緒にいて、室内のふん囲気が、他の施設と少し異なっていた。この点について、案内してくれたその女医さんにたずねると、大人が子どももの面側をみる場合もでてくる点といった。また、精神病患者と精薄者と一緒に生活させている点には、両者をはっきりわけることがむずかしいという意味のことを述べていたが、私は少し、疑問を感じた。この病院の医師たちによって考案された、厚いスポンジの遊具を見せてくれたが、幼児のいすにしたりもできるような形もあり、身体的に不自由な子どものために有効であるようにみられた。この病院は、運動機能の訓練ということにはかなり力を入れていたが、治療保育そのものは、あまり行なわれていない感じだった。

ほかに、ロンドン市内の、アドバンチャー・プレイグラウンドを四、五カ所見学したが、その中の一つは、心身障害児のためにアレン夫人が中心となってやっているもので、各養護学校や

施設から、子どもたちが毎週一、二回、バスにのってやってきて、広いスペースの中で、多少、ハラハラするくらい、思いきり、そのエネルギーを発散させていた。たとえば、人工池で子どもが水にぬれながら、いかだをこいだり、木と木の間にロープをはって、そこに滑車で動く箱をつるし、それにのって遊んだり、高い所から飛びおりて遊べるように、下にたくさんスポンジの層のようなものが積んであったり……。また、非常に大きなタイヤを、何本もの太いロープでぶらさげて、タイヤの上のったり、ロープにぶら下がったりしながら、子どもは、非常に楽しげに遊んでいた。この遊園地はフィルムに収められ、ドイツの会議で紹介されたが、かなり各国の関心を集めていたようだった。

以上は、私がおもに北欧やイギリスで見えてきた精薄児の保育であるが、私が見てきた限りでは、その国の福祉に対する考え方や、国の力の入れ方が反映していると思った。一般に、かなり自然環境のよい所に、広いスペースをとって施設が作られていたが、保育内容そのものでは、驚くほですすんでいるという感じはしなかった。ドイツのベテルを除いては、一般社会との生活の統合というより、むしろ町から離れた場所で、障害のある人たちだけを生活させ、保護し、指導しているという印象だった。一般社会と施設の統合の問題は、かなりむずかしいと思

うが、私たちの障害者に対する認識や理解が深まった時点では、部分的な統合は不可能ではないと思う。

#### 日本での体験

外国のことを述べたが、私は、今年の五月から八月の夏休みにかけて、秋田県の横手市郊外にある重度精薄児の施設に通った。横手は、冬、かまぐらの町として記憶にある方もいるかもしれないが、従来の精薄施設に、重度児の施設が併設され、二十名の子どもに対して、五名の保母がその仕事にあたることになった。真新しい建物は明るかったが、遊戯室には、おもちゃの自動車や、三輪車以外、遊具はまだ入っていないかった。五月、六月と施設を訪れるたびに、子ども数が増して、七月にはほぼ定員に達したようだった。しかし、病気のため、数人入院して、八月になって私がずっと一緒に遊んだ子どもたちは十五名だった。年齢は六歳から十三歳までで、男児が多く、身体の大きい子と小さい子の差が目立った。「遊び」というテーマを持っていた私は、この子どもたちと何をして遊ぼうかと考えたつても、私自身、子ども集団の中に入って、彼らと近づきになることが最初のステップだった。

八月の研究に入る前に、六、七回ほど子どもと一緒に過ごすことができた。最初子どもたちの中に入ってその行動を見ていると、模様のついたボールをころがしたり投げたり、また、私が

まりつきをしてみせるのに、興味を示す子が二、三名、活発に三輪車に乗れる子が、男児三名ぐらいで、ほとんど、どんな刺激にも、反応しない子が、二名ほどだった。また、言葉や、動作などから、自閉的傾向の強い子が二名ほどいたが、Nちゃんは、保母さんや、室内の大人に抱っこされることを、非常に強く、要求してきた。偏食の問題で、かなり保母さんが苦勞している子の一人でもあった。

二十名近い子どもたちは、遊戯室の中で、バラバラに動いていたが、新しい環境に慣れるにつれて、全体としての落着きとどうか、各々、好きな場所等もできてきた。遊戯室の人口密度が高すぎる感じがしたことも否定できない。室内のテレビに特に興味を持っている子が、何人かいるのがわかった。画面をじっと見ている子もいれば、チャンネルを回したり、消したりが専門の子、それをいつも止めようとする子、テレビについても、いつの間にかそれぞれ役割らしいものが、できていった。輪などは、輪を棒に投げ入れるより、むしろ、子どもの腕などに投げ入れて遊んだりする方に、喜びの表情をあらわした。

S子ちゃんは、最初は床のじゅうたんの毛をむしっていたが、やがて、おもちゃの自動車をさかさまにして、車輪を手でまわしていた。この動作はずっと続いている。S子ちゃんに本を渡すと、いつの間にか細かくやぶき始める。やぶいた紙片を、お

もちゃの汽車の煙突から、投げ入れて、つめこんで遊んでいた。Y子ちゃんは、気分がのると、自分の手足を動かす動作を他人に真似することを要求し、その通りにしてやると喜んだ。Y子ちゃんと遊んでいる時、彼女の動作を模倣しながら続いている、次には、私の方が違う動作を示しても、かまわず、彼女は自分のやりたい動作を二、三続ける。しかし、私が彼女の模倣をしないで、一定の動作をじっとやっていると、彼女は動作をやめて、相手を見る。偶然、二、三の新しい動作をしても、なかなか相手の動作を模倣するというところまでいかない。

遊戯室の集団の中で、私は時々一人の子と遊びながら、相手の行動を観察する。この子にとって、好きなこと、できることは何なのか見つけようとした。盲児のFちゃんは、機嫌がよいと相手の言葉を模倣する。一つの言葉をいい続けて、他の言葉をおかない時、逆に、こつちがFちゃんの言葉を模倣し続け、その連続の中で違う言葉を発すると、ひょいと相手の言葉をつたりした。たとえば、Fちゃんが「もしもし」とくり返している。私が「おやっ」といっても模倣しない。そこで、私も「もしもし」とFちゃんの言葉のあとでくり返す。そして、今度は私が「もしもし」と反応する代り「おやっ」という刺激音を返すと、Fちゃんも「おやっ」という。そんな言葉のやりとりは、Fちゃんには楽しそうだった。

二十名の子どもの中で、会話ができる子はHちゃんだけで、Fちゃんは、もしもし、おやっ、ボール等の単語をいうが、影響音が主である。ただ、「いやっ」とか「やだ」とかいう否定語は拒否の態度と共に使っているようで、意味が生きているのかもしれない。目が見えないFちゃんが「ボール、ボール」とさげんでいると、言葉を理解しているHちゃんが、室内のボールを探して、Fちゃんに渡してやる。するとFちゃんは、部屋のすみにすわったまま移動し、両手、両足を同時に使って、ボール遊びを一人でやる。Fちゃんの「ボール」という言葉は、対象物をとらえているのだろうか？ 入所して四カ月ほどたったとき、Hちゃんの語い数は、驚くほど増えていた。持っていた言葉を、表現しないでいた感じである。彼についての記録にも、言葉はほんのわずかしかしやべらないと記されていた。

たとえば、八月のある日、Hちゃんに「今朝、何やったの？」と聞くと、「けんおん」と答えたので、驚いて、保育さんにたずねると、その日は、午前中、子どもたちの検温日だった。Hちゃんは他の子どもたちの名前をどんどん覚えていった。別室でこのHちゃんとMちゃんに玉さし盤をやらせた。Mちゃんは、競争心と思われるものをHちゃんに示した。Mちゃんは、言葉のある程度理解するが、自分では、ウーとかアーしかいえない。しかし、電車ごっこをしたり、ボール遊びをする時、Hちゃん

と共に他児と遊ぶことができる子である。

一方、遊びにも何にもつけない子どもとつきあって、私は、再び、遊びの意味とは一体何かというふり出しにもどった。現実問題として、排せつ訓練、食事、衣類の着脱という身辺の自立のことがでてくる。おむつをしている子が多い。おむつ交換を、子どもたちが全部、いつも喜んでるようでもない。保育士さんが話してくれた。しかし、おやつとか、食事をつけるとき、ドアーに、ほとんどの子が集まってくる。排せつと食事に関しては家庭のしつけの問題を考えさせられた。一名を除く全員が家庭から初めて、施設に入所しているので、家庭の養育環境をそのまま、持ってきている。年齢の高い子ほど、その習慣形成は強化され、新しい学習にかなり困難を示しているように思われた。

精神障害の重い子であれ、軽い子であれ、幼児期の教育、保育が重要ではないかと思う。恵まれた保育の場や、心豊かな保育者が、能力的に制限された子どもたちの可能性と幸せを増大する大きな力となってくれるのではないか。もちろん、いい施設、いい保育者が存在するだけで、精神障害児の根本的な問題が解決されるとは思わない。子どもをとりまくコミュニティや社会が、どう受けとめていくかが、非常に大事なことである。

(尚綱女学院短大)